

2001 年度 JLA 中堅職員ステップアップ研修  
2001 年 9 月 17 日(第 1 回)  
講師 吉田直樹

### 1 図書館の情報化の段階

- ・バックランドは図書館の情報化の段階として、紙資料図書館、機械化図書館、電子図書館を考えたが、機械化図書館と電子図書館の間にインターネット接続によるネットワーク段階を追加すると情報化の諸問題を整理しやすくなる。
- ・業務機械化、インターネット接続、資料の電子化は、情報化の段階であり、各々後段階の基盤という性格もあるが、情報化の要素と考えることもできる。
- ・但し現行の図書館(とくに公共図書館)がそのまま電子図書館に変化することは考えにくい。電子図書館的要素を持った図書館になっていくと思われる。

### 2 図書館の機械化 - 図書館業務管理システムの導入 -

(以下で述べる数字は 1999 年 3 月段階の日本図書館協会調査によるものである)

- ・我が国では、約 5 割の自治体が図書館を設置しているが機械化されている(貸出処理など図書館業務管理システムを導入している)のはそのうちの 7 割程度である。
- ・自治体内の複数の図書館を電算で結んでサービスしているのは図書館のある自治体のうち 2 割程度である。
- ・図書館システムの規模を示す指標としては端末台数が適当であるが、公共図書館の平均的な(中位の)システムがもつ端末台数は 6 台である。
- ・利用者用に開放されている端末の台数はサービスの指標として重要であるが、公共図書館の平均的な(中位の)システムがもつ利用者端末台数は 1.5 台である。
- ・以上にみるように、我が国図書館の場合、量的には機械化段階を十分に経過したとは言えない段階である。
- ・一方、質的には、各ベンダーが提供する図書館システムは C/S 方式、LAN、RDB、Windows、MARC 利用、さらには全文検索等、共通インフラをほぼ整えたので、機械化がネットワークや電子化への基盤となりうる状態になった。

### 3 図書館のネットワーク化 - インターネットへの接続 -

- ・インターネットへの接続はさまざまな便宜を図書館にもたらすが、最近では県立図書館等が提供するサービスの利用するためにも接続が必要な段階になってきた。
- ・インターネット接続の状況調査は 2 年前位のものしかない。今では相当の増加があるものと推測できるが、1999 年 4 月頃の状態では 3 割の自治体がインターネットの利用を行っていた。利用者向けの開放は少ない。
- ・一方、ホームページを開設している公共図書館は日本図書館協会のホームページで最新の状況まで調べられ、およそ 500 自治体なので、図書館のある自治体の約 3 割である。
- ・所蔵目録をインターネットに開放している図書館も図書館協会のホームページで調べられるが、急増しており、現在 300 自治体程度ある。
- ・公共図書館の図書館管理システムはリースの関係で 5 年での更新が多い。更新の機会に蔵書検索を公開することは今後も多いと思われるので、数年間は 200 自治体 / 年前後の増加数で、蔵書検索公開が続くのではないが。
- ・ホームページでの提供情報は、図書館の案内から図書館だより、蔵書検索等がほとんどである

が、地域関係記事索引やレファレンス記録記録集などを提供する図書館も現れている。

- ・横断検索を利用して県域などの総合目録を提供する図書館が増加している。固有名での検索程度の機能しかないが、集中型の目録にくらべコストが安いので普及しそうだ。

#### 4 図書館の電子化 - 電子図書館と図書館資料の電子化 -

##### a 電子図書館

- ・インターネットや情報一般について、ハイパーテキストという情報の構造が重要な役割を果たしているが、紙資料での類似の効果をあげるための様々な工夫を思い浮かべると、図書館員にとってはなじみ易い考え方である。
- ・電子図書館という場合、Xanadu のようにインターネット全体を電子的な図書館として捉えることもできる。
- ・個別のサイトで電子図書館を試みている例は、国立国会図書館や大学図書館の多くのプロジェクトがあるが、もっとも公共図書館に近い事例として自らインターネット公共図書館を名乗る「青空文庫」があげられる。

##### b 電子資料の組織化

- ・電子資料はその媒体にもよるが、一般的に図書館での所蔵資料の範囲からはみ出す可能性が高い。
- ・市販のパッケージ系電子資料(CD-ROM であることが多い)についても、その利用については契約によることがあるのと複製物がオリジナルに比して劣化しない特性から、紙資料と異なる扱いを要する。
- ・電子化に向く資料と向かない資料がある。小説などはもっとも向かないものであるが、それでも電子版が出版され、読書専用のビューワも用意されようとしている。このように電子化は図書館で扱うすべての資料に対して進んでいる。
- ・公共図書館には地域資料の電子化が期待されている。効率的に収集するのであれば、地域に関わるすでに電子化されている資料の収集が重要である。
- ・電子資料の整理はメタデータを作成して管理することになるが、メタデータについては紙データの場合の目録規則のように考え方が具体的に固まっているわけではない。
- ・現段階では図書館の提供する電子資料は、単にホームページに置かれているのみであることが多いが、本格的に電子資料を提供する場合、適切な検索システムとともに提供する必要がある。

#### 終わりに

- ・『2005 年の図書館像』などに見るように公共図書館の将来は地域の情報拠点とする考え方が強く、電子化が積極的に勧められている。
- ・電子化を含む情報化が図書館に大きな利益をもたらすことは間違いないが、公共図書館の基盤は、情報化だけでなく図書館設置自体も含め十分ではなく、自治体による格差も大きい。
- ・自館に適した情報化をむりなく進めることが肝要であるが、そのためにはコストと効果を判断できる人材が必要である。
- ・人材育成の重要性は『2005 年』などでも語られているが、具体的・有効な施策として固まっているわけではない。
- ・また、施策が固まったからといってそれにまかせておけば十分人材が集まり育つものでもない。各図書館員の自学自習が基本である。
- ・近年、公共図書館の職員であることの流動化が激しくなり、図書館員が図書館の勉強をするという動機についていえば、環境は悪化している。
- ・一方でインターネットによる情報入手という、これまでに比べ、環境的に恵まれた面もある。